

国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター通信 2010.03

Iwate University: University Education Center

Contents

退職にあたって02
運営委員会04
入試部門05
全学共通教育企画·実施部門 ·······06
教育評価・改善部門O8
専門教育関係連絡調整部門10
学生生活支援部門11
キャリア支援部門12
全学共通教育授業報告13
環境人材育成プロジェクト14
コンソーシアム15
クリッカー&匠の技16
全学共通教育の理念と教育目標 17
委員会及部門会議名簿18

退職にあたって

成熟した大学になるために一大学のあり方―

佐藤 瀏 大学教育総合センター 副センター長 (全学共通教育企画・実施部門長) (教授 工学部専任担当)

平成20年1月、大学教育総合センターのお手伝いをする決心をしました。その頃、思うところがあって、岩手大学の総合的な業務には携わるまいと心に決めていたので、迷い思い悩んだことも事実です。しかし、自分自身が学び育った岩手大学にこのような面から貢献することも意義のあることと考え、決心してスタッフに加わりました。

平成20年4月の業務開始を控えて、3月30日であったと記憶していますが、前任の岡田仁先生との引継ぎを行いました。きわめて簡潔な引継ぎで、内容については一度聞いたぐらいでは到底理解できるものではありませんでした。

後日、業務を開始すべく大学教育総合センターに向かいました。工学部の正門を出て、国道 46 号線の北側と南側では別世界でした。多少の気恥ずかしさと不安を覚えながら、しかも恐る恐る学生センター棟 3 階の大学教育総合センターに入りました。この日は学務課が設定してくださった、第1回の全学共通教育企画・実施部門会議が開催されました。議題は既修得単位認定作業でしたが、全く理解がおぼつかないまま終わっていました。

かくて大学教育総合センター業務が開始された わけですが、この間、兼務教員の後藤尚人教授と 専任教員の江本理恵准教授にパソコンやその他備 品の準備など行き届いたご配慮をいただきまし た。それに加え、お二人には毎日のように、いわ ゆる初心者である私にセンター業務の何たるかを 懇切丁寧に指導・説明していただきました。今思 い出しますとこれが大変有益で、有難いことでし た。

大学以外の多くの人と接する絶好の機会であり、いくつかの事業を主体的に開催するなど、わずか2年間ではありましたが、密度の濃い時間を過ごすことが出来ました。そのなかで、20年7月にNHK盛岡放送局と共同開催した、地球環境キャンペーン「NHKキャンパスセミナー in 岩手

大学 SAVE THE FUTURE —わたしたちができること—」 の企画は、ツバルの現状を

伝えてくださった写真家遠藤秀一さん(写真参照) の講演とともに、多くの市民が参加してくださっ た、印象的な事業でした。

待ったなしの地球環境問題にもかかわらず、具体的な炭酸ガス削減案は、世界の国々のそれぞれの自己主張によって、提案されないままになっています。

同様のことは大学でも同じです。大学全体の状況には目もくれず、自分の立場にのみこだわり、全学的な見地からの建設的な未来像が提案されない状況はよく似ています。大学の未来を予測し、どのように対応すべきか真剣な議論が必要でしょう。大学の構成員の成熟度がいよいよ試されます。

18歳人口の減少とともに、大学に入学する学生も当然減少し、質的低下をきたしていることを予想させます。今このときこそ、大学の役割は何か、いよいよ大学の真価が問われています。

最後に、大学教育総合センタースタッフの皆さんそして学務課の皆さんの献身的なご協力に、心から感謝して私の任務を終了します。



退職にあたって

退職にあたって

ti 5かみ たなく 専門教育関係連絡調整部門長 村上 祐 (教授 教育学部専任担当)

専門教育関係連絡調整部門長に就任して早くも2年近くが過ぎ、退職の3月を迎えようとしています。erudio9号の挨拶で、「本部門の役割はますます重要になってくる」と述べました。そこで退任にあたっての本稿では、はじめにこのことについて考えてみます。本部門の主たる任務は「専門基礎科目教育の連絡調整」および「基礎ゼミナールの充実」の二つで、前部門長(玉センター長・理事が兼任)時代からのいろいろな取り組みを継承・実施してきました。

ここ数年、専門基礎担当教員(人社学部)の削減・不補充のため、工・農の専門基礎科目の開講コマ数が減少し、クラスサイズが大きくなる傾向が続いています。開講数・授業担当者等は、それぞれの科目ごとに人社・工・農の担当者間で決めていますので、現状では開講コマ数の減少はやむを得ないことと思っています。共通教育科目であったときにも人社学部および担当教員任せで、大学として「専門基礎教育のあり方」について議論するということはありませんでした。

中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年 12月)では、「改革の方向」のひとつとして「基礎教育 や共通教育の望ましい実施・責任体制」を求めています。 本学の全学共通教育の実施・責任体制は一応整備されて きましたが、専門基礎教育については本部門の「連絡調 整」機能があるだけです。このため、国際的に通用する 理系学士育成のための専門基礎教育をどう充実するか、 今後本部門の任務等を拡充して検討していく必要があり ます。また、高校教育および大学入試が多様化し、履修 歴・基礎学力の異なる学生が入学してくる現状では、初 期教育・初年次教育のあり方がますます重要になること は明らかです(上記答申にも述べられています)。これら のことから、専門教育間の連携および専門教育と全学共 通教育等との連携を進めていくという本部門の役割が今 後いっそう大きいものになると思われます。次期部門長 および部門会議構成員のご活躍を期待しております。

次に、大学教育に関係することで印象に残っていることを述べたいと思います。初めて参加したFDは、1998

年の大学審議会答申「厳格な成績評価」を受けて開催された大学セミナーハウス(八王子市)の研修会(2000年1月)です。その中の国学院大学長阿部美哉氏の講演に少なからずショックを受けました。「日本の大学のシラバスは教室外の学習に対する授業計画が欠如し、しかも15回の授業すらやっていないことを併せると、1単位の75%は水増しである。」「自発的学習意欲を向上させるシラバスとなっていない。これが大学入学後に日米の学生に差がつく最大の原因である。」

それでは米国の「教室外の学習」の実態は? Liberal arts college (学部学生の教育を目的としている大学) で 教鞭を執った丸山雅雄元宮城教育大学教授の経験談から 紹介します。「学生はよい成績を取るために一生懸命で、 月曜から金曜までは実によく勉強する。週3回の有機化 学の授業の前にはそれぞれ教科書約10ページ分を読み、 宿題を提出し、実験のテキストを予習する。」「廊下には 丸机と椅子がたくさん置いてあって常に学生が勉強して いる姿が見られ、その集中度にはいつも感心していた。」 (化学と教育、49,826(2001)ほか)。翻って日本の大学・ 学生はどうでしょうか。ひと頃よく言われた「レジャー ランド」ではなくなったとしても(ライシャワー元駐日 米国大使(1961-66)によれば「日本の大学の4年間は時 間の浪費」)、教室外の学習時間は高校の時より短くなっ ており(岩手大学基礎ゼミナール・ガイド、p42)勉強 しているようには見えません(もちろんよく勉強してい る学生もいます)。

この現状は大学だけの問題ではありませんが(例えば、 国際数学・理科教育動向調査 TIMSS によれば、中学 2 年生で、「数学の勉強が楽しいか」に対して、「強く思う」9% (国際平均 29%)、「そう思わない」「まったくそう思わない」は併せて 61%(国際平均 35%) http://www.nier.go.jp/kiso/timss/2003/top.htm)、大学あるいは大学人が先頭に立って日本の教育を考えていく必要があると思います。

運営委員会

運営委員会(平成21年度後期)

センター長玉 真之介

■自己点検評価

今年度の大教センターは、設置から5年間の実績に対する自己点検評価を最重要課題として取り組んでいます。前号でも報告しましたように、4月の運営委員会で「点検評価の指針」を決め、5月には「点検評価小委員会」を設置して、6月の小委員会でセンターの「目標 - 業務 - 取組」を整理して評価を開始しました。8月の運営委員会では、外部評価委員候補者と教員アンケートの実施を決めています。

後期に入ってからは、10月の第3回小委員会で、各業務の「取組評価シート」の原案をまとめたものを審議し、それに基づいて領域別(各部門に対応)の点検評価を行うことを決めました。その領域別の点検評価を11月の第4回小委員会で審議し、別途、取りまとめを行っていた教員アンケートと入学前教育アンケートの集計結果を合わせて、「大学教育総合センター評価報告書」の原案をとりまとめ、12月の第5回小委員会と運営委員会に報告しました。

■外部評価委員会

12月17日に、事前に送付していた「評価報告書(原案)」について外部評価委員による委員会が開催されました。当日、委員長は、秋田大学の吉岡尚文理事・副学長が互選され、委員長の下で「評価報告書(原案)」に対する説明と質疑応答、学内施設の見学、今後の取りまとめに関する協議がなされました。

施設見学では、相談室や就職支援情報室、センター室、CALL 教室などを見ていただきました。CALL 教室では、アイアシスタントについて、私自身が「英語総合Ⅱ」の授業で活用している「お喜楽板」「ドリル」「iカード」「課題・レポート」などを開いて、学生とのやりとりを実際に見ていただきました。

外部評価委員による評価は、1月末までに文書で寄せられ、委員長にとりまとめていただいて提出されます。この外部評価が付け加わって、「評価報告書」は完成となり、3月には印刷・公表となります。

■教員アンケート

9月30日締め切りで実施 した「全学共通教育に関する アンケート」には、179名の



教員から回答が寄せられました。回収率は、43.2%でした。今回のアンケートは、「認知」と「評価」という4象限で問うユニークなスタイルのものでした。日本の大学教育は、学部の専門教育に中心が置かれ、学生が共通教育でどんな教育を受けているか、まったく知らないし、関心もない教員が少なくない大学が実は多くあります。その意味で、まずは、共通教育に対する「認知度」自体が1つの評価指標となるのです。今回のアンケートで、「評価する」「評価しない」が分かれた問題でも、ほとんどの設問で「知っていた」が過半に達していた点は、今後につながる基盤となるものです。

このアンケートからは、ESDをお題目から具体的内容へ、「T字型」人間の具体的な提示、分科会活動の実質化、2年次以降の英語教育の充実、アイアシスタントの利用改善等々が、今後の課題として見えてきました。全学共通教育として開設して3年が経過した「基礎ゼミナール」が93.3%の教員に認知され、74.9%の教員に評価されている事実は、第1期における教育改革の成果として確認できる点です。

■学生満足度の推移

岩手大学生協が平成19年度から実施している「学生生活実態調査」の中から、学生の満足度に関する項目を抽出して、過去3年間の推移をまとめました。その結果、「先生は授業に熱心か?」「授業全般に満足しているか?」「先生との関係に満足しているか?」「大学職員の対応に満足しているか?」「校舎・教室に満足しているか?」「スポーツ施設に満足しているか?」「大学周辺の環境に満足しているか?」「大学周辺の環境に満足しているか?」の7項目で、毎年、満足度が高まっているか?」の7項目で、毎年、満足度が高まっていることがわかりました。中でも、「先生が授業に熱心」は、3年間で10.5%も高まっています。「あなたの大学は好きか?」も87.5%と9割に近い高い比率となっています。これらは、第1期における教育重視、学生重視の成果と言えるものです。

専任教員 永野 拓矢

■平成21年度の活動報告

4年目を迎えた入試部門は、専任教員による約250校の高校訪問や本学単独による説明会実施(県内中心に7会場)など、昨年以上に積極的なPR活動を行いました。このほか、学部教員の高校訪問や入試課事務職員から広報担当として増員があり、本学PRにおけるエキスパートの体制が強化されました。

こうした広報展開が直ちに入試に反映(=志願者増)されるのが理想ですが、実際は800名近い減少となりました。主な理由は「昨年志願増の揺り戻し(高倍率を敬遠)」と「センター試験の2年連続難化」です。平成22年1月に実施された大学入試センター試験は、数学IAや物理I、化学Iの大幅な難化によって特に現役受験生にとって厳しい結果(自己採点)となりました。

東北地区において受験の難易度が比較的高い本学では(受験産業の予想ランキングより)、国公立大進学志向の強い地域とはいえ、センター試験難化の年は高まる現役志向の中では苦境に立たされます(浪人をしない選択から他大学に流出され易い)。「岩手大学志望者は多かったのだが、合格可能性が低く出願できなかった・・・」と県内外の高校から同様の話を伺いました。

本学としては今後「センター試験の平均(難易)に左右されない志願数」を維持するためには、浪人しても是非岩大に入学したい・・・「第1志望層」の増加が必要です。あるいは2志望以下でも本学の印象を強めるためには何をするべきか。またどのように伝達するか等、改めて「岩手大学の魅力とは何か」を模索していくべき転換期と認識しました。

表 平成 22 年度 岩手大学志願者

〈前期日程〉

(削粉口性)					
	募集人員	志願者	志願倍率		
人文社会科学	115 (115)	220 (273)	1.9 (2.4)		
教 育	36 (136)	373 (468)	2.7 (3.4)		
エ	250 (250)	431 (504)	1.7 (2.0)		
農	146 (146)	320 (387)	2.2 (2.7)		
計	647 (647)	1,344 (1,632)	2.1 (2.5)		

〈後期日程〉

	募集人員 志願者		志願倍率			
人文社会科学	50 (50)	377 (474)	7.5 (9.5)			
教 育	57 (57)	434 (487)	7.6 (8.5)			
エ	62 (62)	290 (617)	4.7 (10.0)			
農	33 (33)	184 (203)	5.6 (6.2)			
計	202 (202)	1,285 (1,781)	6.4 (8.8)			

※前期後期ともに()は昨年

今年度の入試部門の主な活動は以下の通りです。

- 1. 高校・予備校への PR 訪問、説明会の開催。
- 2. AO 入試の実施と運営。
- 3. 広報媒体の活用(北海道のラジオ番組に出演)。
- 4. 大学 PR エキスパート講座 (学内研修会) の実施。 上記はいずれも昨年から継続しています。 反省点、改善点 を確認し、翌年の充実を図っています。

■学校訪問の工夫

学校訪問に工夫を施しています。訪問時、教員に説明を行

うだけではなく、「(可能であれば)生徒対象の進路講演を開催し、岩手大学を含む大学進学の魅力を語る」ことを県内外の高校や予備校にて実施しています。平成21年度は10校で即席の「岩手大学説



明会・進学講演会」を開催しました。

高校での説明会では特に岩手県外では本学の説明に固執せず、①大学進学の魅力、②国立大学の学費、③大学パンフレットから読み取る有力な情報(学ぶ内容、進路、資格、就職支援、学生生活・・・)、④受験生としての効果的な学習法など、大学進学に関する全般的な情報を提供しました。特に③は高校の教員や受験産業の社員でも知らないケースが多く、大学間の比較にも効果的と評価を受けています。

予備校生に対しては、①②は省略し、学部学科の説明と特徴や就職・進学状況の説明を行ったあとは、直ちに個別相談に移り、受験生個々の要求に応えました。近年の予備校生は「どこも入学できなかったから浪人した」者はほとんどおらず、志望校初志貫徹型の不合格者か「合格したけどその大学で終わりたくない」等の合格浪人で占められているだけに無目的タイプがいません。それだけに浪人生の視線は鋭く、かつ質問も具体的です。

■ AO 入試の実施

AO 入試は当入試部門が実施運営に深く関わる項目です。 3年目となった当入試では昨年9月に1次および2次選考が実施され、47名の志願に対し募集人員とおり9名の合格がありました。合格後も入学前課題を用意し、センター試験の受験まで、主に学習の取り組みについてアドバイスを行いました。

全学共通教育企画·実施部門

部門長 佐藤 瀏

■平成 22 年度全学共通教育科目新規開講科目一覧

·転換教育科目

「初年次自由ゼミナール」(後期)

月曜日 9-10 校時

人文社会科学部 齊藤 彰一 連合農学研究科 比屋根 哲

保健管理センター 立身・早坂・新沼

大学教育総合センター 永野 拓矢

水曜日 9-10

評価室 大川 一毅 大学教育総合センター 玉 真之介

・人間と文化

「大学の歴史と現在|(前期)

大学教育総合センター 江本 理恵

・総合科目

「環境マネジメント実践学」(前期)

教育学部

梶原 昌五 外

・総合科目

「いわて学 I」(前期集中)

「いわて学Ⅱ」(後期集中)

いわて高等教育コンソーシアム科目

■大規模クラスへの対応

平成22年度開講科目の中で大規模クラスが発生した場合に備え、次のように対応することにしました。

●全学共通教育履修基準・授業支援方策

昨今の多様化した学生に対応するには、少人数のクラスでじっくり指導するのが効果的だと考えられるが、現在の「開講科目数」及び「学生の意思を尊重した履修制度」では大人数クラスの出現は避けられない。

そこで、教員が「教育活動」に力を注げるように、履修人数の多い授業の実施における支援方法を検討した結果、下記のような支援方策を提案した。また、同時に、「履修制限」方法についても次のように確認しました。





新規開講科目紹介「初年次自由ゼミナール」

大学を学ぼう!

評価室 大川 一毅

初年次学生の皆さんにお話ししましょう。

初年次自由ゼミナールは「教わる授業」ではありません。あるテーマについて、問題とすべきことがどこにあるのか自分で発見します。その上で、問題解決に向けた検討方法を考え、計画を立てて調査を進め、その結果を考察して報告する。分からなかったこともはっきりさせて、次の課題とする。初年次自由ゼミは、こうした一連の活動による「学び」と「学びの力」をつける場です。

新規開講科目「大学を学ぼう!」は、皆さん共通の題材である「大学」をテーマとします。大学について、問題意識をもって考え、仲間と話し合い、調べ、答えを求めていきます。最後には「岩手大学づくり」に向けた「提言」をまとめます。それを思い切って学長先生や教育担当理事先生に提出しましょう。「提言」の内容は、授業や入学試験、奨学金のことなどもあるでしょうし、キャンパスツアーの企画、大学の景観づくり、大学グッズの開発、大学スポーツなど、ワクワクする企画が発案されるかもしれません。

しかし「勝手気ままに言いたい放題」が目的ではありません。15回の授業は、大きく3つに分かれます。まずは最初に「大学を知ろう」というユニット。ここではミニレクチャーを含め、日本の大学や大学を取り巻く状況を理解していきます。次のユニット「大学についてもっと調べよう」では、これまで学んだ知識をふまえ、さらに自分たちで問題設定を行い、調査を進めます。最後のユニット「提言をまとめよう」では、自分たちの調査検討を「客観的妥当性」のある根拠に高め、それをもとに問題解決の方途を提言します。相手を納得させる表現の工夫も必要です。活動はグループで取り組み、学部の枠を超えた仲間達と力を合わせ、それぞれの「持ち味」を活かしていきます。この授業は新たな学友との出会いの場でもあるのです。授業時間以外の調査学習や話し合いも重要です。

皆さんは大学の「主人公」です。そのフレッシュな発想と力を岩手大学に注ぎ込む。そんな「学びの場」にしていきましょう。

全学共通教育企画·実施部門

支援方法

履修申告者数に対応して支援を実施する

- * 150 名以上 希望者には、TAを1名配置する
- * 200 名以上 希望者には、TAを2名まで配置する
- * 250 名以上 <u>履修者制限(抽選等)を可能とする</u> ex. レスポンスカード等を用いて抽選(事務が 補助)

履修制限

- * 250 名以上となった場合は、<u>抽選等で履修制限</u> をすることを可能とする。
- *全学部の学生の受講可能性を確認したうえで、 学部・学科ごとの受講時間帯指定を可能とする

上記の履修申告者が多い場合以外に履修制限を 実施する場合は、大学教育総合センターに相談し てください。

■放送大学プロジェクト

平成21年度の「放送大学との教育協力型単位 互換科目」の開講状況と受講者数を以下の表に示 します。

	科目名〈岩手	科目名〈放送大学〉	受講	
〈前期〉				者数
	共通基礎・外国語	英語総合 I (初級) 他	「英語の基本('08)」他	計65
	教養・人間と文化	人類の歴史と	「人類の歴史・	3
		地球の現在	地球の現在('07)」	
V 774 TT 7.2	教養・人間と社会	現代の諸問題	「転換期の教師('07)」	16
全学共通 教育科目		社会と知的財産	「社会と知的財産('08)」	1
教育科目	教養・人間と自然	数理のひろがり	「初歩からの数学('08)」	1
		生命のしくみ	[人体の構造と機能('05)」	6
	教養・高年次課題科目	高年次課題科目特別講義Ⅱ	「問題発見と	7
			解決の技法('08)」	
専門教育	人社:国際文化	文化記号論Ⅲ	「認知科学の展開('08)」	12
科目	教育:生涯教育	生活空間論	「住まい学入門('07)」	7
〈後期〉				•
V 777 T172	共通基礎・外国語	英語総合 I (初級) 他	「英語の基本('08)」他	計41
全学共通 教育科日	教養・人間と文化	理想と文化	「基礎教育学('07)」	3
教育科目	教養・高年次課題科目	高年次課題科目特別講義I	「大学と社会('08)」	2
専門教育	人社:人間科学	精神医学	「心の健康と病理('08)」	69
科目	人社: 国際文化	文化記号論特講 I	「表象文化研究('06)」	0



新規開講科目紹介「初年次自由ゼミナール」

連合農学研究科 比屋根 哲

初年次自由ゼミナールは、1担当教員あたり20名を上限とするゼミナール形式の参加型授業ですが、具体的な課題や教材は受講メンバーが確定してから考えることになりそうです。現時点では、本学が掲げているESDの理念に即して、「『対話を力に』体験ゼミナール」をサブタイトルにしたプログラムを検討中です。

ESD は持続可能な社会を担う人材を育成する教育的取り組みです。学生は本来、持続可能な社会をつくるために何らかの形で自分の力を役立てたいと願っているはずで、ESD はこうした学生の願いを大きな力に変える役割を果たす教育活動と位置づけられます。

昨年度、私の研究室では大学教育でESDを推進するために、まず学生が「持続可能な社会」についてどのような意識を持っているのか、また持続可能な社会と自分との関わりについてどう考えているかを明らかにするための詳細なインタビュー調査を実施しました。その結果、環境問題等に対する意識の高い学生でも、地球温暖化をはじめとするグローバルな問題を「大きすぎる課題」と捉え、こうした課題に立ち向かうために必要な人々と「繋がり」の経験にも乏しいか、「堅い話題を持ちかけて仲間を失いたくない」等の理由で「繋がり」をあえて求めない学生もいることがかわりました。

学生が人々と繋がり、グローバルな課題にも立ち向かう自信を付けてもらうためには「対話」の経験を持つことが必要だと思います。とくに今日の学生の現状を考えた場合、「対話」の場を意識的に大学教育の中で設定することが大切ではないかと感じます。この科目では、学生の「対話」の場を実現し、相手の考え方の違いを理解しながら、それでも共同で取り組めることは何かを考え行動するささやかな体験を授業の中で実現させたいと考えています。授業では、現地視察による課題の発見、学外者との交流、ワークショップ等による意見のとりまとめ等を、一部集中講義形式で実施する予定です。

教育評価・改善部門

専任教員 江本理恵

■全学共通教育授業公開

平成21年の間、全学共通教育のすべての授業と農 学部の一部の授業を公開する「授業公開」を実施しま した。

今回も保護者の方々に授業モニターになっていただき、大学の授業に対する率直なご意見をお伺いしました。「この授業は個人的に関心があり、おもしろかったです。ただ学生が10名ほどおくれて入ってくる態度が気になりました。私語も多かったです。」など、大学ならではの講義内容を評価する一方で、学生の受講態度を問題とする意見も寄せられました。「学生の受講態度」は、授業を担当する教員、学生双方が考えなければならない問題で、今後、取り組むべき課題の1つだと考えています。

■講演会・研修会等の開催

催しました。

今年度は、いわて高等教育コンソーシアムの一環と して、次の講演会を開



岩手大学会場



岩手医科大学会場

ての可能性を感じることができました。

● FD 講演会「大学教育の革新と FD の新展開」

日時: 平成 21 年 12 月 18 日 15:00 ~ 17:00 講師: 国立教育政策研究所高等教育研究部 総括研究官 川島啓二氏

● FD 研究会「FD のあり方を考える」

日時:平成22年3月5日 15:20~17:30 講師:京都大学高等教育研究開発推進センター 教授 田中毎実氏

■入学前教育の実施

大学教育総合センターでは、運営委員会の下に入学 前教育実施小委員会を設置し、推薦・AO・社会人入 試合格者を対象とした入学前教育に全学体制で取り組 んでいます。

平成21年度の入学前教育の内容は、「読書レポートの作成」と「e-Learning を利用した数学の自主学習」です。生徒は、各学部+センターから推薦された15冊の課題図書の中から1冊の本を選び、読書レポートを作成します。生徒には、提出したレポートに対して300字程度のコメントが返されます。

今年度の提出状況を下記の表に示します。

平成 21 年度 入学前教育レポート提出状況一覧

課題図書	人社	教育	I	農
科学が進化する5つの条件	0	0	11	0
タテ社会の人間関係	8(1)	1	1	0
権利のための闘争	3	0	0	0
100年の難問はなぜ解けたのか	3(2)	2 6	1	
学問の春 <知と遊び>の 10 講義	1	0	0	0
思考の整理学	4(1)	14	15	8
知識人とは何か	0	0	0	1
ご冗談でしょう、ファインマンさん〈上〉	0(1)	0	5	0
ウェブ進化論	0	1	1 11	0
考えるヒト	1	1	6	1
科学者という仕事	1	0	14	3
生き方	6	5	10	7
竹中式マトリクス勉強法	0(1)	3	6	1
フィンランド 豊かさのメソッド	17(2)	19	6	4
宮沢賢治のちから	2(1)	13	1	3
提出数合計(通)	46(9)	59	92	29
提出率	100%	95%	100%	100%

※ () 内は AO 入試合格者によるもの

■シラバス作成の手引き

平成22年度シラバス作成の手引きを 作成しました。シラバス各項目の説明に 加えて、シラバス作成のポイントを前半 4ページにまとめました。授業設計時に ご活用ください。



教育評価・改善部門

■部門名の変更

教育評価・改善部門は、部門名に「評価」が入っているため「教員評価」を担当していると思われがちでした。そこで、その誤解を防ぐために、部門名を「教育改善部門」とすることが決まりました。平成22年度より「教育改善部門」になります。今後ともよろしくお願いします。

■学生による授業アンケート

教育評価・改善部門では、前後期に開講されるすべての全学共通教育科目を対象として、学生による「授

業アンケート」を実施しています。授業アンケートの 結果は、個々の授業担当教員に返却する他、部門会議 で議論した基準にしたがって「全学共通教育優秀授業 科目」を選出しています。

平成21年度前期の優秀授業科目は以下の通りです。 平成22年1月20日に、倉田理事をお迎えして、全学 共通教育優秀授業科目の表彰状授与と、科目担当教員 と理事との懇談会を行いました。

この学生による「授業アンケート」の実施方法については、今後、アンケート実施回数を減らす方向で議 論を進めています。

平成 21 年度前期 学生による授業アンケートに基づく全学共通教育優秀授業科目

■人間と文化

0011	心の理解/適応の理解	山			浩
0010	心の理解/適応の理解	早	坂	浩	志
0007	心の理解/心の科学	松	畄	和	生
0009	心の理解/適応の理解	佐	藤	īF	恵

■人間と社会

0058	多文化コミュニケーションA	松	岡	洋	子	
0055	対人関係の心理学	JII	原	正	広	
0037	経済のしくみ	笹	尾	俊	明	
0057	キャリアを考える	中	村	謙	_	
0039	現代社会と経済	高	瀬		央	

■人間と自然

0065	自然と数理	Ш	田	浩	_
0073	物質の世界	吉	澤	正	人

■情報科目

0110	情報基礎	五	味	壮	4
0116	情報基礎	福	永	良	浩
0112	情報基礎	白	倉	孝	行

■外国語科目(英語)

0309	英語コミュニケーションⅠ	(上級)	Blair Benjamin Reed
0318	英語総合Ⅰ(上級)		小 川 春 美
0327	英語コミュニケーション	(中級)	Gavin Young
0344	英語コミュニケーション	(上級)	Blair Benjamin Reed
0326	英語コミュニケーションⅠ	(中級)	Blair Benjamin Reed
0345	英語コミュニケーションⅠ	(中級)	Gavin Young
0324	英語コミュニケーションⅠ	(上級)	Bern Mulvey
0343	英語コミュニケーションⅠ	(上級)	Jeffrey Martin
0301	英語総合Ⅰ	(上級)	Gavin Young
0311	英語コミュニケーション「	(中級)	Harevama James Franciscus

0329 英語コミュニケーション I (初級) Hareyama James Franciscus

■外国語科目(英語以外)

 0472
 上級日本語A
 松 岡 洋 子

 0468
 初級韓国語(入門)
 齊 藤 春 佳

0430 初級フランス語(入門) グラ アレクサンドル

0448	初級ロシア語(人門)	金	子	白台	计	
0473	上級日本語B	岡	崎	正	道	
0476	上級日本語D	菊	地		悟	
0464	初級韓国語 (入門)	崔		在	縒	

■健康・スポーツ科目

01016	体力トレーニング	佐く	木	彩	野
01063	テニス	吉	田		実
01035	バレーボール	若	林	美	帆
01066	体力トレーニング	佐々	木	彩	野
01045	バドミントン	冏	部	令	奈
01014	バスケットボール	冏	部	王	利
01021	ニュースポーツ	上	濱	龍	也
01064	サッカー	冏	部	囯	利



平成 22 年 1 月 20 日 全学共通教育科目優秀授業表彰状授与式にて



専門教育関係連絡調整部門

部門長 村上 祐

■新入生アンケートについて

第二期中期目標・中期計画に基づいて、初年次教育を充実することを目的とする「新入生アンケート」について検討し、来年度から実施することとしました。これは、「読書」「文章作成」「コミュニケーション」「数値処理」「パソコン使用」等、大学での学習を進める上で必要となる能力や意欲について入学生の現状を調べ、教養教育全般の共通認識とするとともに、これらの基礎を1年次にしっかり身につけてもらうための方策を検討していくデータとしようというものです。なお、1年次終了時に再度「初年次教育アンケート」調査を行って、1年間の教育を受けた後の学習効果を測り、さらなる教育改善に繋げていく予定です。

■第2回基礎ゼミナール情報交換会の実施について

基礎ゼミナールの充実を目的として、「第2回基礎ゼ ミナール情報交換会 | を開催しました。12 月 25 日 (金) にもかかわらず参加者が多数で、基礎ゼミへの関心の高 さを物語っています。はじめに4学部各2名から、実施 内容の事例を紹介していただきました。次いで、基礎ゼ ミの全学共通教育科目としての趣旨・教育目標をあらた めて確認するとともに、工夫した取り組みや実施上の問 題点について情報交流しました。なかでも「成績評価」 や「少人数クラス」に関する意見交換が活発に行われま した。ここでは、「基礎ゼミの4つの教育目標すべてを 満たすことが必要であるので、少人数クラスとなるのが 望ましい。少人数できめ細かな指導を行えば、成績評価 に反映される。」という意見を紹介しておきます。配付 資料では、工学部全体の学生評価(基礎ゼミの満足度) が上昇し他学部と肩を並べるまでになったこと、および 全学の休・退学者が基礎ゼミを全学共通教育とした時点 から減少していること、などが注目されました。

■岩手大学と放送大学との教育協力単位互換について

平成 17~20 年度の「単位互換モデル構築に向けた研究プロジェクト」を引き継いで実施されている「放送大学との単位互換」については、本部門の任務に鑑み本部門で取り扱うこととし、実施体制と来年度の科目を整備しました。

■部門名称の変更について

大教センターの「入試部門」「キャリア支援部門」を

除く4部門の名称変更がセンター運営委員会で提案されました。これを受けて、本部門の名称変更について検討し、「専門教育等連携部門」を提案することとしました。これまでの業務(専門教育間だけではなく、専門教育と全学共通教育・初年次教育や放送大学等との連絡調整)を簡潔に表し、しかも「連絡調整」を「連携」に進化させる趣旨を含んでおります。

今回は、人文社会科学部と工学部の兼務教員から抱負 等をいただきましたので掲載します。

大西良博先生(准教授 人文社会科学部専任担当)

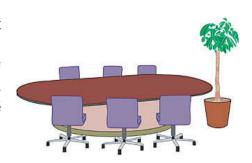
本任務と少しずれますが、ここでは、専門基礎科目、 特に、数学や物理学の講義に、いかに黒板が重要である かを述べてみたいと思います。

コンピューターからスライドを映写して講義する方が増えてきましたが、数学や物理学の講義では、ある一時に提示すべき事柄は相当多いので、スライド一枚は狭すぎます。広い黒板にいくつかの数式や説明を記し、それらを精密に組合せて、次のstepに進みます。そのとき、学生は小さな exercise の連続となるので、考える間(ま)を与えてくれる板書は、それに適しています。また、刻々確認する学生の理解状況から、補足をするにも便利です。学内の教室整備が黒板使用を前提になされていくことを期待しています。

小川 智先生(教授 工学部専任担当)

兼務教員を拝命して随分長くなります。17年度の共通教育・企画実施部門に始まり、18、19年度の教育評価・改善部門、20、21年度には、専門教育関係連絡調整部門とキャリア支援部門。その間、運営委員会委員を含め、毎月、何度も工学部キャンパスから学生センターの会議室に通ってきました。色々な観点から、教育にかかわる大学教育総合センターの重要性について見てきましたし、改善すべき多くの課題が山積していることも感じ

てきないが、活にといい、では、できまとが、活にといいではばいます。



学生生活支援部門

部門長 小笠原 義文

■学生指導担当教職員研修会及び課外活動サークル リーダーシップセミナーの実施について

平成21年11月21日(土)に、国立岩手山青少年交流の家を会場に下記の内容で実施しました。

【学生指導担当職員研修会】

討議内容:「留年生対策」

ワークショップ:「発達障がい」

学生の諸問題について、各学部の学生指導担当 教員及び学務部職員が一堂に会し、研修と意見交 換の場を持つことにより、学生の指導体制をより 充実させることを目的として実施しました。

【課外活動サークルリーダーシップセミナー】

ディスカッション:

「①サークルから同好会への格下げについて」

「②サークル活動の活性化、新入生勧誘について」 講演会:「起業等体験談について」

各サークルの活動の活性化を図るために、意見 交換を行うとともに、サークル間の親睦と交流を 深め健全なサークルの育成を目的として実施しま した。

【研修会・セミナー共通企画】

教職員と学生の懇談会:

「話題①サークル活動の現状 |

「話題②大学での学習と高校までの勉強

~大学生がやるべきことは何か?~」

後半は、共通企画として、教職員と学生が8班に分かれて二つのテーマで話し合い、特に話題②では、結論を1つにまとめ「大学での学習とは○○である。」の標語を作り、発表しました。

後日、学生センター内で「あなたはどの標語に 共感できますか?」ということで、投票を募り、 98票の投票を得ました。その投票結果が、以下の とおりです。

【大学での学習に関する標語】投票結果

「大学での学習とは、「○○」である。」

1位 ①②班:「Change and Challenge」

2位 ④班:「わからないを大事にする」

3位 ⑧班:「極楽」(楽しく極めるの意)

4位 5班:「将来への架け橋」

5位 ⑦班:「**努力**」

6位 6班:「**使えるものは何でも使う**」

(自分がやりたいことに対して本のような"モノ"だけではなく、自分達をサポートしてくれている教員の方々をいい意味で"利用"する事が積極的な学習を生み、自分を高めることにつながると

いう意)

7位 ③班:「**理解・企画・発信**」

■岩手大学学生表彰制度の見直しについて

特に顕著な業績をあげた学生(学生団体)の研究活動、課外活動及び社会活動等に対する学生表彰制度ですが、今年度から「学長賞」と「奨励賞」に区分し、表彰にあたっては、学業成績も考慮することを確認しました。

■平成 22 年度 Let's びぎんプロジェクトの募集

学生が共同で行う独創的なプロジェクトを支援する「Let's びぎんプロジェクト」を募集し、1件あたり50万円を上限に経費を支援します。書類審査及び面接し10件程度の採用予定で、平成21年度の支援は、13万円~50万円でした。応募締切は、平成22年5月7日(金)です。

■平成 21 年度学長と学生との懇談会について

本年度は、以下のとおり開催しました。

○第1回:平成21年5月27日(水)

『第23回ガンチョンタイム』において、テーマを「岩手大学長と語ろう」として開催。

○第2回:平成22年3月5日(金)

各学部4年次生4名及び大学院修了年次生1名によりテーマを「岩手大学に入学して良かったこと」として開催。

キャリア支援部門

■変動する就職、採用環境

1980年代後半のバブル期をピークに約10年サイクルで経済の好不況が表れ、これに同期して就職採用環境も変動してきた。これに対し企業の求める人材は、質より量の時代から必要人材、質重視と厳選採用化が進み、求人倍率と内定率が同期しない傾向も出ている。大学と社会は「良質な人材」の提供と活用というテーマでさらに連携を密にしていく必要がある。

■キャリア支援部門の目標と業務

部門の目標である、「学生に将来を見据えたキャリア教育の教授と的確な就職情報の提供及び就職支援」を達成するために、主に3つの業務に取り組んでいる。一つは、「キャリア教育の開発と実施」、二つ目は、「企業や卒業生等からの社会的ニーズの把握」、三つ目は、「就職相談並びに就職情報の提供」である。以降に後期に実施した代表的な取組についてご紹介します。

■キャリア教育実施概況

開講3年目となる「キャリアを考える」は前後期合わせて500名近い学生が受講した。前期実施の産学官連携による岩手県立大学との共同開設講座「地場産業・企業論」も2年目となり内容の充実がはかられた。後期は従来の知財ワークショップにキャリア教育としての要素を取り入れた「知財ワークショップ 副題:地場産業ブランド戦略論」を開講した。一般公開された発表会では、学生の研究発表に対し、出席された産学官民の方々から活発な質疑と助言をいただき学びをさらに深化させることができました。以下に講座の内容を紹介します。

■ 2009 年度「知財ワークショップ」

副題:地場産業ブランド戦略論

- 1. 講座のねらい 知財の観点から地場産業を考え、地元定着 のための課題を整理
- 2. 講座の主な目的
 - ○地元ブランドの魅力探求 知財を活用した地域興しや企業 化について考える
 - ○地元定着のための課題の整理、顕在化、共有化
 - ○社会人としての基礎力を実践的に学ぶ
- 3. 講座の進め方、特長
 - ○目標に向かって、課題を認識し、自らが学ぶ事を支援する「能動型授業」
 - ○グループワークを多く導入しチームワークやコミュニケー ション能力を学ぶ
 - ○知財担当教員、弁理士、キャリア・アドバイザーが連携して 支援
 - ○産学官民連携キャリア支援
- 4. 講座の内容
- 第一部:地場産業を取り巻く環境と知財の理解

①盛岡市長講演 (一般公開)「地域の活性化」「地元ブランドの

キャリア・アドバイザー 中村 謙一

重要性 | 「若者への期待 |

- ②授業ガイダンスと知財概論、課題提示
- ③盛岡市ブランド推進課長講演「盛岡ブランドの歴史と今後の 展開 |
- ④課題検討と指導

第二部:地元ブランドの調査研究(調査計画~訪問調査研究~整理)

- (5)訪問調査計画内容の検討、指導助言
- ⑥現地訪問調査研究

盛岡手づくり村(盛岡地域地場産業振興センター、協同組合、 各工房)センター運営の概容説明、展示資料室、南部鉄器職人 との懇談

各グループに分かれて企業訪問

A班 (4名): アロニア 盛岡手づくり村 (盛岡地域地場 産業振興センター)

B班 (5名)·D班 (4名):南部鉄器 (株岩鋳)

C班(5名): 南部しぼり染め(草紫堂)

(7)プレゼンテーション能力学習と調査課題の掘下げ

第三部:地元ブランドの魅力と課題、地元定着のための課題整理・ まとめ・発表

- ⑧課題整理まとめ指導、助言
- ⑨課題発表・共有化 (一般公開) 学生グループの発表と産学官 民からの指導助言

■先進事例の調査実施

全国で最初にジョブカフェとの連携による学内キャリア相談スポットを開設した山口大学と、民間活力を導入してキャリア支援を推進している愛媛大学を訪問調査。その結果、本学の優れた点は、キャリア教育推進や就職支援における産学官連携推進や教員と職員組織の連携推進であった。逆に改善の余地が見られたところは就職支援におけるサービス人員の不足や学生への個別支援体制およびファシリティーの不足であった。

■就職支援システム等の更新

従来のシステムは平成14年度に導入されて以後更新されず、民間就職支援サイトを利用している学生にとっては、時代遅れのシステムとなっていた。このため今年度に全面更新し、求人情報、ガイダンス、企業説明会、就職相談等について、学内はもちろん、学外や携帯電話からも閲覧・申込を可能とした。キャリア支援課からは、登録された学生のメールアドレスに随時ガイダンス等の情報提供も可能である。また、企業からは本学のシステムに直接求人情報の入力が可能であり、学生へのリアルタイムな情報の提供と、膨大な情報をシステムに入力する作業の軽減を図った。キャリア支援課のホームページについてもシステムの更新に併せ全面更新し、学生・卒業生・企業への提供情報の充実と利便性を改善させた。

全学共通教育授業報告

「岩手大学の環境マネジメント」(総合科目:後期)

科目担当者:福永良浩(代表・大学教育総合センター)、笹尾俊明・古川務(人文社会科学部)、梶原昌五(教育学部)、 小田伸一(農学部)、大塚尚寛(工学部)副学長、中島清隆(EMS 推進室)、矢野耕一郎(岩大生協)EMS 学生委員会

本科目は ISO14001 の概要、関連法規、岩手大学の 進める EMS について理解し、身近な環境問題の発見・ 観察と解決のための基礎知識の修得することを目的と して、平成21年度の後期からスタートしました。こ れには、平成22年度に本学が「ISO14001の認証取得 に向けた取り組み」の一つであり(環境教育という部 分)、また環境省からの「(ISO14001 と産学官民連携 を活用した π 字型) 環境人材育成プログラム | のプロ ジェクトの一環でもあります。さらに、平成22年度 の前期に「環境マネジメント実践学」、「環境マネジメ ント実践演習」の科目が予定されており、環境人材育 成のための実践的環境力を養えるようにプログラムさ れています。学生は「岩手大学の環境マネジメント」 及び「環境マネジメント実践学」の単位を修得するこ とで、「内部監査補助員」の資格を有することになり ます。さらに、これら2科目と「環境マネジメント実 践演習」の3科目6単位に加えて、環境教育科目2単位、 ESD 関連科目 4 単位を取得(合計 12 単位)し、環境 に関連するインターンシップやボランティアを行うこ とで、「環境管理実務士」という学内認定資格を付与 する予定です。学生には自分の目指すスタイルで環境 マネジメントをステップごとに無理なく学習できるよ うに配慮されています。

現在、本科目を1年生70名が履修し、特に人文社 会科学部と工学部の学生の比率が高くなっており、主 観的ですが環境マネジメントに興味・関心の高い学生 が多いと感じております。また、来年度開講(環境マ ネジメント実践学及び環境マネジメント実践演習) の 希望調査アンケートでは、約40名近い学生が次のス テップである科目を受講したいと回答しています。こ れら学生の期待に答えられるよう、本科目の PDCA もしっかりと行い、より良い講義にしていきたいと思 います。なお、本科目は内部監査員となるための教職 員向け講義にもなっております。本年度の具体的な 内容は以下に記載します。本科目は学内からオンデ マンドのストリーミング配信 [URL: https://budori. cc.iwate-u.ac.jp]を行っておりますので(ログイン後、 [コンテンツ一覧]→ 2009 年度]→[EMS])、興味のあ る方は是非ご覧頂けますと幸いです。

1:ガイダンス

講義の目的、進め方、履修等について(20 分程度)、 岩手大学生協(20 分程度)及び EMS 学生委員会(20 分程度)の活動状況

- 2:岩手大学の環境方針・環境目標 岩手大学の環境方針、環境目標、EMS など
- 3:環境問題の現状と課題 基本的な環境問題について
- 4:EMS、ISO14001とは? 環境管理および環境監査に関する国際規格、 ISO14001の狙い、取得状況等
- 5:ISO14001 の要求事項

一般要求事項(4.1)、環境方針(4.2)、計画(4.3)、実施 及び運用(4.4)、点検(4.5)、マネジメントレビュー(4.6)

- 6:環境報告書、環境会計 環境報告ガイドラインの紹介および環境会計の基本 事項の説明
- 7:大学に関連する環境側面(環境重点管理項目) 資源・エネルギー投入・排出、化学物質、廃液管理 等、環境報告書をもとに解説
- 8:大学に関連する法規制 1 環境基本法、環境基本計画、環境配慮促進法など
- 9:大学に関連する法規制 2 循環型社会形成推進基本法、廃棄物処理法、ダイオ キシン特措法、PCB 特措法など
- 10: 内部監査 内部監査の意義・役割など
- 11:EMS 公開セミナー ISO14001 の認証取得に向けた講演会
- 12:本学の問題点を発見し、課題等について調査する (グループ分け)
- 12:岩手大学の環境影響・課題についての検討 環境報告書と本学の環境影響や課題についてまとめ る(グループ学習)
- 14:岩手大学の環境影響・課題についての報告会 1 本学の環境影響や課題についての調査結果を報告す る(グループ報告)
- 15:岩手大学の環境影響・課題についての報告会2 本学の環境影響や課題についての調査結果を報告する(グループ報告)

環境人材育成プロジェクト

環境人材育成プロジェクト推進教員 中島 清隆/プロジェクト責任者 玉 真之介

■環境人材育成プロジェクトのご紹介

今年度から、環境省で採択された「平成 21 年度環境人材育成のためのプログラム開発事業」として、『ISO14001 と産学官民連携を活用した「 π 字型」環境人材育成プログラム』(以下、環境人材育成プログラムと略す。)を進めてきました。当プログラムは、ESD(Education for Sustainable Development:持続共生教育 岩手大学訳)の価値観に基づき、基礎的環境力(横軸)の充実に加え、人文社会科学・教育学・工学・農学、個々の学部における専門分野(縦軸 1)のほかに、「環境マネジメント」の実践的環境力(縦軸 2)を備えた「 π 字型」環境人材の育成を目指すものです。

環境人材育成プログラムでは、平成 21 年度に、 次の4つの取組を実施しています。

- 1. 共通教育における環境教育の充実
- 2. 環境マネジメント実務の実習プログラム開発
- 3. 学生による地域のグリーン化支援
- 4. 大学による「環境管理実務士」の資格認定

【取組 1】 ① 基礎ゼミナールで環境への意識づけをはかるために用いる環境教育用 DVD を更新しました。②「持続可能なコミュニティーづくり実践学」や「地元企業に学ぶ ESD」など学外との連携科目も含め、計 11 科目を ESD 科目として選定し、2 科目 4 単位以上を「環境管理実務士」資格要件と位置づけることとしました。③ 11 の環境教育科目のうち、「森林と環境」と「動物と環境」の教材を作成しています。

【取組 2】 ISO14001 の授業科目として「岩手大学の環境マネジメント」を開講しました。1 年生70 名、2 年生16 名、3 年生2 名、教職員13 名が講義に登録し、受講しました。また、来年度開講予定の② ISO14001 学内監査実務科目「環境マネジメント実践学」、③ 地元中小企業の経営グリーン化支援科目「環境マネジメント実践演習」の準備も進められています。③ の一環として、岩手県

中小企業家同友会にご協力いただき、地元中小企業における環境報告書の実態を調査しました。この結果は、INS: CSR/環境人材育成研究会や環境人材プログラム開発・実証委員会、いわて環境人材育成フォーラムで報告しました。〔取組2〕の全3科目6単位は「環境管理実務士」の資格要件になります。

〔取組 3〕 学外団体と連携して、インターンシップ・ボランティアを推進します。来年度は、ボランティアの理解度を深めるためのセミナーを開講する予定です。

〔取組 4〕 岩手大学内資格「環境管理実務士」の要件をまとめた平成 21 年度版の要綱を作成しています。

その他にも、環境人材育成プログラムホームページ(http://www.iwate-u.ac.jp/ecoedu/)の開設、リーフレットの作成・普及、INS:CSR /環境人材育成研究会1周年記念シンポジウムと 2009年度 EMS セミナー、いわて環境人材育成フォーラムの共催など、環境人材育成プログラムの広報に努めました。



平成 22 年度も、今年度の取組を続けるとともに、 [取組 2]:「環境マネジメント実践学」と「環境マネジメント実践学」と「環境マネジメント実践演習」の開講、 [取組 3]:ボランティア活動セミナーの実施、などを通して、 ESD の価値観に基づいた「 π 字型」環境人材の育成にさらに尽力していきます。

大学教育

いわて高等教育コンソーシアム 後藤 尚人

*ヤングリーダーズ国際研修:「食と持続可能な社会」 (H21.2.18-27)、「農産物の適正価格と持続可能な社 会 | (H21.8.26-9.4)を実施しました。

【コンソーシアム構成大学】

平成 20 年度文部科学省戦略的大学連携支援事業「い わて高等教育コンソーシアムにおける地域の中核を担 う人材育成と知の拠点形成の推進」採択を機に発足し た「いわて高等教育コンソーシアム」は、岩手大学、 岩手県立大学、岩手医科大学、富士大学、盛岡大学の 5大学による連携組織です。

【平成 21 年度までの活動実績】

教育研究環境の基盤整備「取組1]

- *遠隔講義(TV会議)システムを連携5大学+アイー ナキャンパスに導入しました。
 - → ノーベル賞受賞益川敏英先生の講演 (H21.6.13) 配信、医 科大特別講義の配信(H21.6.10、10.30、11.13)、FD 講演会 の配信(H21.12.16)
- *アイアシスタントを、盛岡大学、富士大学に導入し
- * e ラーニングシステムを導入(サーバーは岩手大学、 コンテンツ作成システムは5大学へ配分)しました。
- * SD 担当者向け合宿(H21.3.5-6)、研究協力業務 SD 合宿(H21.9.17-18)を実施しました。

教育力の向上 [取組2]

- *カリキュラム・プラニングを扱う医科大の合宿 (H21.7.17-18)、学士力と PBL がテーマの岩手大の合 宿(H21.8.20-21)に連携校から教員が参加しました。
- *平成22年度からの開講に向けて、「いわて学」の講 義内容の検討及び担当者を決定しました。
- *5大学の平成22年度開講科目から35科目を「特色 ある講義」として選定しました。
- *学生の地域参加型プロジェクトを5件採択しまし 100
 - → 医科大「地域医療の実態調査」、県立大「ホームレス支援ボ ランティア」「光るどろだんご作り」など

知の拠点形成 [取組3]

- *岩手県教育委員会と「平泉文化の総合的研究基本 計画 |に基づく共同研究推進に関する覚書を締結 (H21.4.1) しました。
- *岩手県教育委員会との共催で「平泉文化フォーラム」 (第9回:H21.2.7、第10回:H21.12.5)を開催しました。
- *地域医療研修見学研修発表会を開催(H21.7.24)しま した。

大学進学率の向上「取組4]

- *県内モデル3高校(一関第一、一関第二、宮古)を選 定し、遠隔講義(TV 会議)システムを設置しました。
- *県内高校生が5大学で模擬授業を受ける「ウイン ターセッション |を拡大し、大学の分野別・研究領 域を紹介(H21.12.27)しました。
- *「アイーナに行こう! ― 岩手5大学、駅前講義| を実施(H22.1.18-23、H22.3.8-13)しました。

地域の活性化 [取組5]

- *2次元3次元動作解析システム、形態・体組成測定 システムを用い、岩手県テニス協会ジュニアチーム が様々な測定・分析を実施(H21.11.10)しました。
- ※ 学生の主体的活動をテーマに、シンポジウムを開催 (H22.2.6) しました。
- ※ コンソのロゴ(岩手大3年鈴木俊一さん作)が選定さ れました。



単位互換科目の履修申告方法がスマートになります!

- ※履修申告時期が、これまで前期科目は2月下旬、後期科目は8月上旬に指定されていましたが、平成22年度から、 各大学の履修申告時期に合わせて他大学の単位互換科目の履修申告ができるようになります。
- ※単位互換科目の情報はコンソーシアムのホームページから簡単に検索でき、履修申告用の「特別聴講学生志願書」 も自動作成できます。

** http://www.ihatov-u.jp/

クリッカー&匠の技

■クリッカーに対する学生の反応

今年度、「知的財産入門」(200人規模)、「科学と技術の歴史」(50人規模)でクリッカーを活用した授業がなされた。クリッカーとは、学生に小さなリモコンを渡し、質問にボタンで回答させて、その結果を直ちにパワーポイント画面上に示すシステムである。

学生の反応は2つの授業とも大変に良く、「授業に参加している気がする」と「手を挙げるのと違って、周りを気にしなくて良い」が6割前後を占めた。また、「他の人の意見が集計ですぐわかる」も3割前後であった。関心をお持ちの先生には、大教センターから貸し出すので、ぜひ試していただきたい。 (玉 真之介)

アンケート集計結果

65 BB 75 D	実施授業	業科目名						
質問項目	知的財産入門	科学と技術の歴史						
O 学部と学年を教えてください。								
a. 人文社会科学部	23%	44%						
b. 教育学部	12%	27%						
c. 工学部	52%	27%						
d. 農学部	13%	2%						
a.1 年	96%	58%						
b.2年	1%	29%						
c.3年	2%	2%						
d. 4 年	1%	8%						
e.5年	0%	0%						
f.6年	0%	0%						
1 クリッカーを使った授業を受けるのは、何回目ですが	か?							
a. はじめて	5%	15%						
b. 2回目	91%	77%						
c.3回目	3%	2%						
d.4回目	0%	0%						
e. その他	0%	6%						
2 クリッカーの操作はどうでしたか?								
a. 簡単だった	88%	100%						
b. 少し戸惑った	11%	0%						
C. その他	1%	0%						
3 クリッカーを使ってよかったと感じたことは?								
a. とにかく面白い・眠くならない	19%	17%						
b. 授業に参加している気がする	52%	67%						
c. 学習意欲がわく	8%	15%						
d. 手を挙げるのと違って、周りを気にしなくてよい	60%	60%						
e. 他の人の意見の集計がすぐにわかるのがよい	39%	27%						
f . その他	3%	4%						
4 クリッカーを使って問題と感じたことは?	0.0							
a. 配布と回収に時間がかかる	43%	35%						
b. 集計がでるまでに少し時間がかかる	16%	8%						
c. 正しく送受信されたか不安になる	48%	40%						
d. その他	9%	8%						
5 クリッカーの授業での利用について、あなたはどの	のように考え	ますか?						
a. 多くの授業で活用してほしい	82%	79%						
b. あまり活用してほしくない	9%	4%						
c. その他	9%	6%						
6 クリッカーを使った方がよいと思うのは、どの。								
a. 大人数の講義スタイルの授業	91%	85%						
b. 外国語教育の授業	11%	2%						
c. 専門基礎教育等の基礎的知識習得の授業	16%	21%						
d. ゼミナール等の双方向的な授業	20%	10%						
e. その他	2%	0%						
受講生合計(人)	198	48						
AND HELL VV	.00							

■『匠の技』

大学教育総合センターで取り組んでいる「教授技術『匠の技』伝承プロジェクト」(https://takumi.iwate-u.ac.jp/)では、他大学の特徴的な授業科目の授業コンテンツを提供しています。クリッカー活用授業の事例として北海道大学で行われている授業を撮影した授業コンテンツを用意しました。ぜひ、アクセスしてみてください。

(江本理恵)

北海道大学 鈴木先生インタビュー



「クリッカーを使うことによって絶えず教員はテストされている。どれだけ学生に伝わっているのか考えるので、話すのがうまくなってきた気がする。」と語る鈴木先生。

北海道大学で素粒子物理学の教育研究に従事されている鈴木先生は、一方で授業でのクリッカー活用の第一人者でもあります。今回、鈴木先生の授業の様子を撮影させていただき、クリッカーを使う授業についてのインタビューを行いました。

インタビューの中で特に印象に残ったのが、「クリッカーを使うようになって、学生に向かって授業をしている実感がもてるようになった。以前は黒板に向かって授業をしている感じで、半分ぐらいの時間は黒板に向かっていて、学生が何を考えているのかわかっていなかった。」という言葉です。物理学等の科目を担当することが多かった以前は、黒板に数式を書いて終わり、だったのが、クリッカーを使うようになって、「数式は宿題で確認させて、授業中には数式や公式以前のイメージを共有することに重点をおける」だそうです。

最近は様々な道具が開発されています。道具がなくても授業はできますが、うまく利用すれば新しい可能性もうまれてきます。もし、興味がありましたら、大学教育総合センターまでご連絡ください。

全学共通教育の理念と教育目標

理

岩手大学は、各学部が行う専門教育とならんで、所属する学部にかかわらず全学生が共通に受けるべき教育として全学共通教育を設け、「基礎的な知識の習得を求め、多様な領域に対する学問的関心を喚起するとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する」ことをその理念としています。

この理念を実現するために、全学共通教育は岩手大学の全ての教職員の関心・責任・協力のもとに 実施されています。

= 教育目標=

全学共通教育科目は、「転換教育科目」、「共通基礎科目」及び「教養科目」によって構成され、それぞれの教育目標を設定して全学共通教育の理念の具体化を図っています。また、この三つの区分の下に、それぞれに対応する授業科目群を設けて、より具体的な教育目標を明示しています。

さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development: ESD)の10年」(注)を共通に意識することに努めています。

(注) 2002 年にヨハネスブルク (南アフリカ共和国) で開催された「持続可能な開発のための世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット) で日本が提案して決議に盛り込まれ、同年の国連総会においても日本の提案で採択されて、2005 年から開始されている世界的な教育キャンペーン。

1. 転換教育科目の教育目標

転換教育科目は、全学共通教育へのイントロダクション、専門教育へのイントロダクション、そして大学生活へのイントロダクションの三つを役割とする科目です。転換教育科目は、大学での新たな学びについて、少人数のクラスで学生が互いに学び合うことを目指しています。また、大学での学びを社会生活への第一歩と意識して、そこでのルールやモラルも合わせて学ぶことも目標の1つです。

2. 共通基礎科目の教育目標

共通基礎科目は、学生が在学中に教養科目と専門教育科目の学業を進めるうえで、また卒業後の 社会生活を進めるうえで共通に必要な基本的技能やその基礎となる知識を全学生に習得させること を教育目標とする科目です。授業科目は、「外国語科目」、「健康スポーツ科目」および「情報科目」 に区分されます。

3. 教養科目の教育目標

教養科目の教育目標は、特に上記の全学共通教育の理念における「幅広い教養」、「深い教養」及び「総合的な判断力」という3項目に基づいて、次のように設定されています。

- ①さまざまな学問分野の「ものの見方・考え方」や知識を幅広く習得することにより、自分自身の専門分野の仕事の全体的な意味や役割を知り、その専門的な知識を生かすことのできるような幅広い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ②あらゆる分野の日常生活の営みの基盤になっている各種の常識・通念を根底的に深く問い直すことができるという意味での、深い「ものの見方・考え方」や知識を習得することにより、自然との関係においても人間との関係においても、創造的・個性的に生きるうえで必要な深い教養を自ら培うことへの教育的支援。
- ③多角的な「ものの見方・考え方」や学際的な知識を習得することにより、激しく変動する現代 社会の複雑な諸問題に柔軟に対応できるような総合的な判断力を自ら培うことへの教育的支援。 以上のような教育目標の達成をめざす教養科目は、「人間と文化」、「人間と社会」、「人間と自然」、 「総合科目」、「高年次課題科目」及び「環境教育科目」に区分されます。

委員会及部門会議名簿

大学教育総合センター運営委員会委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏	名	担 当 部 局 等
センター長	玉	真之介	理事(教育·学生担当)
副センター長	佐 藤	瀏	工学部
入試部門長	玉	真之介	理事(教育·学生担当)
全学共通教育企画·実施部門長	佐藤	瀏	工学部
教育評価·改善部門長	後藤	尚人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上	祐	教育学部
学生生活支援部門長	小笠原	義 文	教育学部
キャリア支援部門長	橋本	良 二	農学部
			人文社会科学部
司必故民力此不法日	遠藤	孝 夫	教育学部
副学部長又は評議員	藤代	博之	工学部
	岡 田	秀 二	農学部
	吉 村	泰樹	人文社会科学部
ルな明<i>はそ</i>日 ド	菅 野	文 夫	教育学部
教務関係委員長	小 川	智	工学部
	吉川	信 幸	農学部
学務部長	山中	和 之	学務部

大学教育総合センター会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏 名	担 当 部 局 等
センター長	玉 真之介	理事(教育·学生担当)
副センター長	佐 藤 瀏	工学部
入試部門長	玉 真之介	理事(教育·学生担当)
全学共通教育企画·実施部門長	佐 藤 瀏	工学部
教育評価·改善部門長	後藤尚人	人文社会科学部
専門教育関係連絡調整部門長	村 上 祐	教育学部
学生生活支援部門長	小笠原 義 文	教育学部
キャリア支援部門長	橋 本 良 二	農学部
	山崎憲治	大学教育総合センター
	永 野 拓 矢	大学教育総合センター
センター専任教員	江 本 理 恵	大学教育総合センター
	福永良浩	大学教育総合センター
学務部長	山中和之	学務部

委員会及部門会議名簿

■入試部門会議委員名簿

(平成21年/日1日)

■人試部门云識安貝石溥					(平成21年4月1日)
	氏		名		担当部局等
部門長	玉		真之介		大学教育総合センター長
専任教員	永	野	拓	矢	大学教育総合センター
	中	村	安	宏	人文社会科学部
兼務教員	土	屋	明	広	教育学部
水切 软负	西	村	文	仁	工学部
	古	濱	和	久	農学部
	西	崎		滋	人文社会科学部
	海	と澤	君	夫	人文社会科学部
	内	Щ	Ξ	郎	教育学部
各学部入試委員会	境	野	直	樹	教育学部
(正·副委員長)	大	石	好	行	工学部
	平	塚	貞	人	工学部
	原	澤		亮	農学部
	武	田	純	_	農学部
入試課長	長	代	健	児	学務部

■全学共诵教音企画·実施部門会議委員名簿 (平成21年8月1日)

名	担当部局等 工学部 大学教育総合センター 外国語分科会 健康・スポーツ分科会 情報基礎分科会 思想と文化分科会
治夫子子子	大学教育総合センター 外国語分科会 健康・スポーツ分科会 情報基礎分科会
夫 : 久 : 子	外国語分科会 健康・スポーツ分科会 情報基礎分科会
· 人 · 幸 · 子	健康・スポーツ分科会 情報基礎分科会
幸 〔子	情報基礎分科会
子	
	思想と文化分科会
1 生	心と表象分科会
仁	公共社会分科会
道	現代の諸問題分科会
・ 善	生物の世界分科会
. 秀	自然と数理の世界分科会
明	科学技術分科会
直	環境分科会
もみ	人文社会科学部
-	教育学部
明	工学部
直	農学部
悟	学務部
	道善秀明直み一明直

■教育評価・改善部門会議委員名簿

■教育評価·改善部門会議到	(平成21年4月1日)				
	F	£	名		担当部局等
部門長	後	藤	尚	人	人文社会科学部
全学共通教育企画·実施部門長	佐	藤		瀏	工学部
専任教員	江	本	理	恵	大学教育総合センター
分 世教员	福	永	良	浩	大学教育総合センター
	西	牧	正	義	人文社会科学部
	Ŧī.	味	壮	平	人文社会科学部
	Л	П	明	子	教育学部
兼務教員	武	井	隆	明	教育学部
(学部選出委員)	鈴	木	正	幸	工学部
	Щ	П		明	工学部
	橋	爪		力	農学部
	柴	崎	茂	光	農学部
学務課長	今	野		悟	学務部

■専門教育関係連絡調整部門会議委員名簿 (平成21年4月1日)

	E	£	3	各	担当部局等
部門長	村	上		祐	教育学部
専任教員	Щ	崎	憲	治	大学教育総合センター
	大	西	良	博	人文社会科学部
兼務教員	犬	塚	博	彦	教育学部
(各学部教務委員会選出教員)	小	Ш		智	工学部
	颯	田	尚	哉	農学部
学務課長	今	野		悟	学務部

■学生生活支援部門会議委員名簿

(平成21年4日1日)

■子土土冶又拔部门云藏安	(平成21年4月1日)		
	氏	名	担当部局等
部門長	小笠原	義 文	教育学部
	白 倉	孝 行	人文社会科学部
兼務教員	清 水	茂 幸	教育学部
(各学部学生委員会選出教員)	南	正 昭	工学部
	築城	幹 典	農学部
	能 登	恵一	人文社会科学部
学部選出教員	名古屋	恒 彦	教育学部
于即及山狄其	一ノ瀬	充 行	工学部
	喜 多	一美	農学部
学生支援課長	白 崎	隆典	学務部

■キャリア支援部門会議委員名簿

(平成21年4月1日)

	氏		名		担当部局等
部門長	橋	本	良	$\vec{=}$	農学部
	松	岡	勝	実	人文社会科学部
兼務教員	大河	可原		清	教育学部
(各学部就職委員会選出教員)	小	Щ		智	工学部
	三	輪		弌	農学部
キャリア支援課長	大	内		正	学務部



|編|集|後|記|

今年度はプロジェクトの関係でいくつかの大学に お邪魔して、授業を撮影させていただきました。大 学によって、学年歴も授業時間の設定も開講科目も 教室のつくりもまったく違います。あらためて、大 学は自分たちのことを自分たちで決めることのでき る機関なのだと再認識しました。責任重大です。



erudio12



🥦 国立大学法人 岩手大学 大学教育総合センター

Iwate University: University Education Center 〒020-8550 岩手県盛岡市上田3丁目18-34

【入試部門】

【全学共通教育企画·実施部門】

【教育評価·改善部門】

【専門教育関係連絡調整部門】

【学生生活支援部門(学生支援課)】

【キャリア支援部門(キャリア支援課)】 tel.019-621-6059

tel.019-621-6926

tel.019-621-6925

tel.019-621-6924

tel.019-621-6925

tel.019-621-6058

【部門共通】fax.019-621-6928

電子メール uec@iwate-u.ac.jp Webサイトhttp://uec.iwate-u.ac.jp/





